

## アカシヤ材で作られた板と横木に象徴されるイエシュア

### ベレーシート

●シリーズ「神の御住まい」についての学びの第四回目です。今回は幕屋の枠組みであるアカシヤ材で作られた板と横木について学び、そこに象徴されているイエシュアについて考えてみたいと思います。



●幕屋建造の主な指示において、前回は幕屋(「ミシュカーン」 מִשְׁכָּן)をおおう四枚の幕について学びましたが、次は、幕屋の骨組みとなる板(立板、壁板)と横木についての指示が記されています。その箇所を読みましょう。

【新改訳改訂第3版】出エジプト記 26章 15～30節

- 15 幕屋のために、アカシヤ材で、まっすぐに立てる板を作る。
- 16 板一枚の長さは十キュビト、板一枚の幅は一キュビト半。
- 17 板一枚ごとに、はめ込みのほぞ二つを作る。幕屋の板全部にこのようにしなければならない。
- 18 幕屋のために板を作る。南側に板二十枚。
- 19 その二十枚の板の下に銀の台座四十個を作らなければならない。一枚の板の下に、二つのほぞに二個の台座を、他の板の下にも、二つのほぞに二個の台座を作る。
- 20 幕屋の他の側、すなわち北側に、板二十枚。
- 21 銀の台座四十個。すなわち一枚の板の下に二個の台座。他の板の下にも二個の台座。
- 22 幕屋のうしろ、すなわち、西側に、板六枚を作らなければならない。
- 23 幕屋のうしろの両隅のために板二枚を作らなければならない。
- 24 底部では重なり合い、上部では、一つの環で一つに合うようになる。二枚とも、そのようにしなければならない。これらが両隅となる。
- 25 板は八枚、その銀の台座は十六個、すなわち一枚の板の下に二個の台座、他の板の下にも二個の台座となる。
- 26 アカシヤ材で横木を作る。すなわち、幕屋の一方の側の板のために五本、
- 27 幕屋の他の側の板のために横木五本、幕屋のうしろ、すなわち西側の板のために横木五本を作る。
- 28 板の中間にある中央横木は、端から端まで通るようにする。
- 29 板には金をかぶせ、横木を通す環を金で作らなければならない。横木には金をかぶせる。
- 30 あなたは山で示された定めのとおり、幕屋を建てなければならない。

●おそらく、読むだけではとてもそのイメージが湧かないと思います。イラストを用いながら、この箇所に書かれていることを理解したいと思います。

## 1. 幕屋で用いられる材木のすべては「アカシヤ材」

●15節「幕屋のために、アカシヤ材で、まっすぐに立てる板を作る。」、26節「アカシヤ材で横木を作る。」とあります。幕屋において使われる材木はすべてこのアカシヤ材です。祭壇も契約の箱もパンの机も香壇も柱もすべてがアカシヤ材です。このアカシヤの木について、ステーブンス・栄子先生は「荒野の幕屋の中に見るイエス様」(オメガ出版、2015年)という小冊子の中で次のように説明しています。



荒地に生えるアカシヤ

「中東の荒野に育つアカシヤの木は、根の広がりか木の大きさの25倍にも達すると言われ、どんな暴風にもびくともしません。年間雨量が25mmから60mmの乾燥地帯のため、根を深く伸ばして生き延びているのです。このような気候の下でゆっくりと成長する木は硬く育ち、そのほとんどが腐ったり虫に食われたりしません。また、養分のほとんど無い砂漠において、特殊な栄養補給を行って生きているのです。」(4頁)。

●また、アカシヤは鋭いとげをもち、かつ、まっすぐに伸びないという性質を持っているため、「幕屋のために、アカシヤ材で、まっすぐに立てる板を作る。」(出26:1)という主の指示には、長さ4.5m、幅68.4cmからなる板を何枚も作るため、大変な労力が求められる作業であったはずで

●ユダヤのラビは「アカシヤ」の贖罪的性質について次のように説明しています。つまり、原語の「シッテイム」(שִׁטִּימ)は、以下の四つのことばの頭文字から出来ていると説明しているのです。

- ① שְׁלוֹם 「平和を意味するシャーローム」の「ש」(「シン」)という頭文字。
- ② טוֹבָה 「親切を意味するトーヴァー」の「ט」(「テット」)という頭文字。
- ③ יְשׁוּעָה 「救いを意味するイエシュアア」の「י」(「ヨッド」)という頭文字。
- ④ מְחִילָה 「赦しを意味するメヒーラー」の「מ」(「メーム」)という頭文字。

つまり、幕屋で使われるアカシヤ材は 人となられたイエシュアを象徴していると考えられます。

## 2. 幕屋の中は金をかぶせられた立板で囲まれている

●幕屋の内部は入口の幕と聖所と至聖所を隔てる垂れ幕と天上の天幕を除けば、幕屋の中に置かれているパンの机も燭台も香壇、そして契約の箱とその上にあるケルヴィムもすべて「純金」でおおわれ、幕屋の立て枠となっている板のすべてに「金」がかぶせられています。その膨大な量の「金」はいったいどこから得たのでしょうか。それは聖書によれば、イスラエルの民が出エジプトの際に手に入れたようです。と言っても、「主はエジプトがこの民に好意を持つようにされたので、エジプトは彼らの願いを聞き入れた。こうして彼らはエジプトからはぎ取った」(12:36)とあるように、イスラエルの民はエジプトから銀の飾りや、金の飾りを求めたのです。いわば、主がやがて民とともに住むための幕屋を建造する上で必要となるものを、あらかじめ、出エジプトの際に与えていたということです。

●幕屋の建造に必要な材料は、すべて心から進んでささげる人の奉献物によってまかなわれましたが、主への奉納物の中に、金や銀や青銅が含まれていました。ところが、アカシヤ材は奉納物のリストにはありません。いったいそれはどこで仕入れたのか、聖書には記されていませんが、彼らが旅することになる荒野では多くのアカシヤ材が容易に手に入れることができたのだと考えられます。

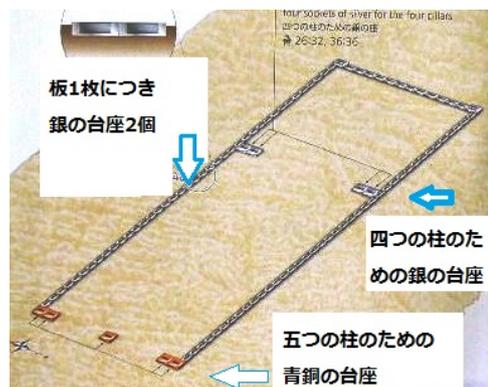
●ところで、「純金」と「金」は同じ金でも質が異なっているようです。幕屋の壁や柱、契約の箱やケルベイム、香壇、パンの机や燭台、また幕屋の二つの聖なる幕を一つにする 50 個の留め金も「金」であり、今回取り上げている幕屋の壁板となるアカシヤ材にもすべて金がかぶせられています。したがって、これらを合わせると実に膨大な量の「金」(「ザーハーヴ」זָהָב)が使われているのは一目瞭然です。聖書の中で「純金」(「ザーハーヴ・ターホール」זָהָב טָהוֹר)という言葉が最初に使われているのは幕屋の中にある「契約の箱」に関してで、その箱をおおっているのが「純金」です。契約の箱を運ぶときに使われる担ぎ棒にも「金」がかぶせられています。しかし、「純金」という指定はありません。「純金」と「金」とでは質が異なっているのかも知れません。「純」は「きよい」という意味の形容詞「ターホール」(טָהוֹר)で、動物や物や場所の「きよさ」を表します。ちなみに、この「きよい」の反意語は「汚れ」で、その原語は「ターメー」(טָמֵא)です。

●「金」(「ザーハーヴ」זָהָב)という語彙が聖書で最初に登場するのは創世記 2 章 11 節で、「ハビラ」という地には金があったと記されています。「ハビラ」はエデンの園から流れ出る四つの支流の一つであり、エデンの園の郊外にある地です。その地に良質(「トーヴ」טוֹב)の「金」や「宝石」が産出されたとあるので、その源泉であるエデンの園にはそれ以上のすばらしい宝があったことを伺わせます。しかしその「エデンの園」も「天にあるものの影」でしかありません。したがって、幕屋の中にあるものにかぶせてある純金や金といえども、本体である「混じりけのないガラスに似た純金でできている」永遠の都(黙示録 21:18)の写しとも言えます。つまり、「純金」が象徴しているのは、「神の本質の現われ」、「神の栄光の輝き」であるイエシュアなのです。その金の下にあるアカシヤはイエシュアの人間性を表わすものであるとすれば、幕屋で使われる木材はすべて神性と人性を兼ね備えたイエシュアを象徴していることは一目瞭然です。

### (1) 板を立てるための銀による台座

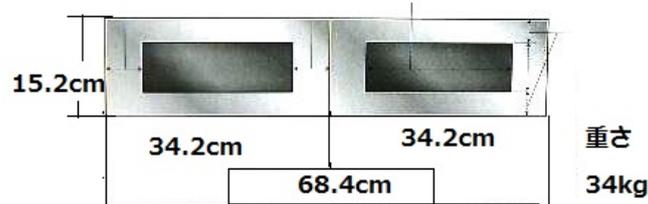
●幕屋の枠組みとなる板が、しっかりとまっすぐ立つための様々な工夫が施されています。それらはすべて神の指示によるもので、人間によって考案されたものではありません。幕屋建造の手順としては、まず、北側と南側にそれぞれ 20 枚の板を、西側には 8 枚の板を立てますが、そのためには、下図に見るように、**一枚の板の下にある二つの「ほぞ」に二個の台座が必要です。**つまり北側だけでも 40 個、南側も 40 個、西側は板が 8 枚であるため台座は 16 個。合わせて **96 の台座**が必要です。しかもその全重量は、少なくとも 96 個×34kg=3,264kg となり、幕屋の台座だけでも大変な重さになります。幕屋が移動するということは大変な労力を必要することであつたはずです。

●板 1 枚(長さ 10 キュビト=4.56m、幅 1 キュビト半

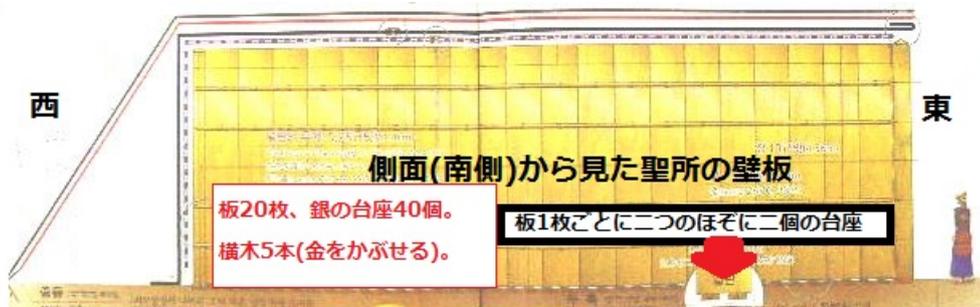


# משכן

=68.4cm)に必要な銀の台座は2個です。その銀の台座一つの重さは、1 タラント(34kg)です。二人の大人で持たないと疲れてしまいそうですが、そこにも隠された意味があるかも知れません。板1枚をしっかりと立てるためには二つの銀の台座を必要とし、その重さは68kg にもなるのです。



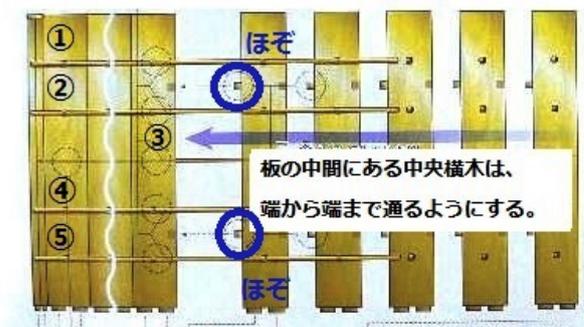
●そのようにして板が立てられるのが、下図です。



## (2) 立板を横に連結するための二つのほぞと五つの横木

●立板を横に連結させるための二つの「ほぞ」があり、さらにそれぞれの立板には横木を通すための金の輪が取り付けられています。外側から見える横木は4本ですが、目に見えない横木が板の中を通っています。幕屋の長さは13.68mとすれば、目に見えない中央横木は板の中の「端から端まで通るようにする」(出 26:28)とありますから、とても長い棒が必要であったはずですが。すべては強度を増すための構造になっています。ちなみに、連結するための「ほぞ」のことを、ヘブル語では「手」を意味する「ヤード」(יָד)という語彙が使われています。

### 板の連結するためのはめ込みのほぞ(2個)と5本の横木

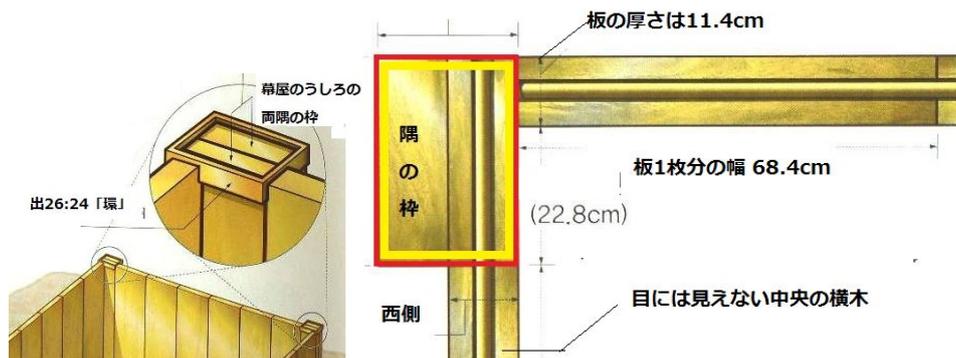


●幕屋の南側と北側の20枚の板、および西側の8枚の板には、それぞれ金をかぶせられた5本の横木によ

ってつなぎ合わされています。5本の横木も壁となる板を補強する役割を持っていますが、なぜ、5本の横木なのでしょう。「5」という数は、人間の責任を表わす象徴的な数です。使徒パウロはエペソ人への手紙の中で、復活して昇天したキリストご自身がそのからだである教会に対して、「ある人を**使徒**、ある人を**預言者**、ある人を**伝道者**、ある人を**牧師**また**教師**としてお立てになった。」と記しています(エペソ 4:11)。その目的は「聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるため」だとしています。これらの賜物は主ご自身が本来持っておられた働きですが、これらの働きはからだとしての骨格の部分を担当しており、特に、横木の中でも目に見えない「端から端まで通るように」するという中央横木は、骨格の中でもその中枢を担う背骨に当たる働き、すなわち、「みことば」にかかわる働きと解釈することも可能です。立板を補強する「横木」の存在は、キリストのからだでいう骨格の働きを示唆しているのかも知れません。

### (3) 幕屋のうしろ(西側)の両隅の枠

●幕屋全体をさらに補強するために幕屋のうしろ側(西側)の両隅が以下のようになっています。そこにも5本の横木が金の輪で通されていますが、目に見えない中央の横木は以下のようになっており、特別な工夫がなされています。



●普通、一つの建物の全体の強度とそのまとまりは「隅のかしら石」にかかっています。幕屋ではその部分が上記のように、幕屋のうしろにある(西側)の両端の枠の部分になります。聖書には、メシアなる主が「隅」(「ピンナー」**פִּנָּה**)と関連づけられている箇所があります。

① 【新改訳改訂第3版】詩篇 118 篇 22 節

「家を建てる者たちの捨てた石。それが礎の石(=隅のかしら石)になった。」

② 【新改訳改訂第3版】イザヤ書 28 章 16 節

「だから、神である主は、こう仰せられる。「見よ。わたしはシオンに一つの石を礎として据える。これは、試みを経た石、堅く据えられた礎の、尊いかしら石(=尊い隅の石)。これを信じる者は、あわてることがない。」

### 3. 金でおおわれた幕屋の板が象徴していること

●モーセの幕屋におけるすべての部分は、やがて神がこの世にお遣わしになる御子イエシュアを啓示しています。とすれば、今回の幕屋の金でおおわれたアカシヤ材による幕屋の立板(壁板)は、イエシュアをどのように啓示しているのでしょうか。二つのことが考えられます。一つは「**神の本性の完全な現われとしてのイエシュア**」と、もうひとつは「**人となられたイエシュア**」です。幕屋の床は地面そのものであり、御子イエシュアが完全に人となられたことを象徴しています。と同時に、その地面の上に神の栄光の輝きとして御子が金でおおわれた板で組み立てられた幕屋に啓示されていると考えられます。

●ヘブル人への手紙の 1 章と 2 章において、その偉大な真理が語られています。

#### (1) 神の栄光の完全な現われとしてのイエシュア

●幕屋の骨組みとなる板の一枚一枚、横木の一本一本、柱の一本一本にかぶせられている「金」が象徴しているのは、御子が「神の栄光の輝き」、「神の本質の完全な現われ」であることを、何度も繰り返し告げ知らせていると考えられます。ヘブル人への手紙にそのことが告知されています。「金」は神の栄光の象徴です。

【新改訳改訂第3版】ヘブル人への手紙 1 章 3 節

御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の全能者の右の座に着かれました。

●この箇所を次のように四つの項目に整理できるのではないかと思います。

- ① 御子は神の究極的啓示者
- ② 御子は万物の相続者、創造者、そして保持者
- ③ 御子は罪のきよめを成就し、神の右に着座された永遠の大祭司・王
- ④ 御子は神の栄光の輝き、神の本質の完全な顕現者

●イエシュアは「だれも父を見た者はありません。ただ神から出た者、すなわち、この者だけが、父を見たのです。」(ヨハネ 6:46)。そして、「わたしを見た者は父を見たのです」(ヨハネ 14:9)と言われました。この宣言はイエシュアと神がまったく等しいという意味が含まれています。

#### (2) 完全な人としての性質を持たれたイエシュア

●幕屋の板は銀(「ケセフ」**קֶסֶף**)でできた台座の上にしっかりとめ込まれています。しかもその「銀の台座」一つの重さは 36kg もあり、それを持ち運びするレビ人たちは大変だったことと思います。しかし、荒地の上にそのまま設置される幕屋にとっては、とても安定感を与えるものであつたろうと考えられます。一枚の板の下に二つの銀の台座が地の上に置かれていたのです。なにゆえに「銀の台座」なのでしょう。

●ところで、これらの莫大な銀はいったいどこから来たのでしょうか。実は「銀」は贖いの代価を象徴します。神はモーセに 20～50 歳までの男子を数えるように命じて、数えられた者は神に贖いの代価を払わなければなりません。数えられたすべての男子は、一様に、銀半シエケルでした。その贖いの代価を払った者だけが神の民に数えられたのです。ところで、銀半シエケルという価はどれほどでしょうか。アブラハムは銀 400 シエケルで畑を買い、青年ヨセフは金 20 シエケルでエジプトに売られました。イスカリオテのユダは銀 30 シエケルでイエシュアを売りました。ですから、神にささげる贖いの代価が銀半シエケルというのは少額と言えます。

●神が人に求めた贖いの代価はほんのわずかです。しかし、イエシュアが私たちの贖いのためにささげられ代価は計り知れません。その代価はイエシュアの傷も汚れもない小羊のような尊い血、すなわち神の御子イエシュアのいのちそのものです。だとすれば、ほんのわずかの代価を要求されたとして、それを惜しむような心が少しでもあるならば、救われた者としてなんと恥ずべきことではないでしょうか。

●ヘブル人への手紙 2 章では、イエシュアは神の子どもたちを兄弟として呼ぶことを恥とされない方として表されています。

【新改訳改訂第 3 版】ヘブル人への手紙 2 章 14～15 節

14 そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。

これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、

15 一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。

●御子イエシュアが「血と肉とを持たれたのは」、人と同じになることによって、人と一体となり、その血という代価によって永遠の贖いをなすためでした。ここに金の板が、地の上に置かれた「銀の台座」を必要とする必然性があったのです。御子イエシュアは永遠の贖いをおして、今も永遠の祭司としての務めを天においてなしておられます。天と地をつないで永遠に一つとされる方はイエシュアただひとりです。揺るがされることのない御国の民として、王なるイエシュアをさらに深く知る者となれるように祈りましょう。このことが、今私たちがこの世に置かれている目的であり、また、務めなのです。

2016.3.13